

三浦事件「ロスからの報告書」

# 13人目の 目撃者

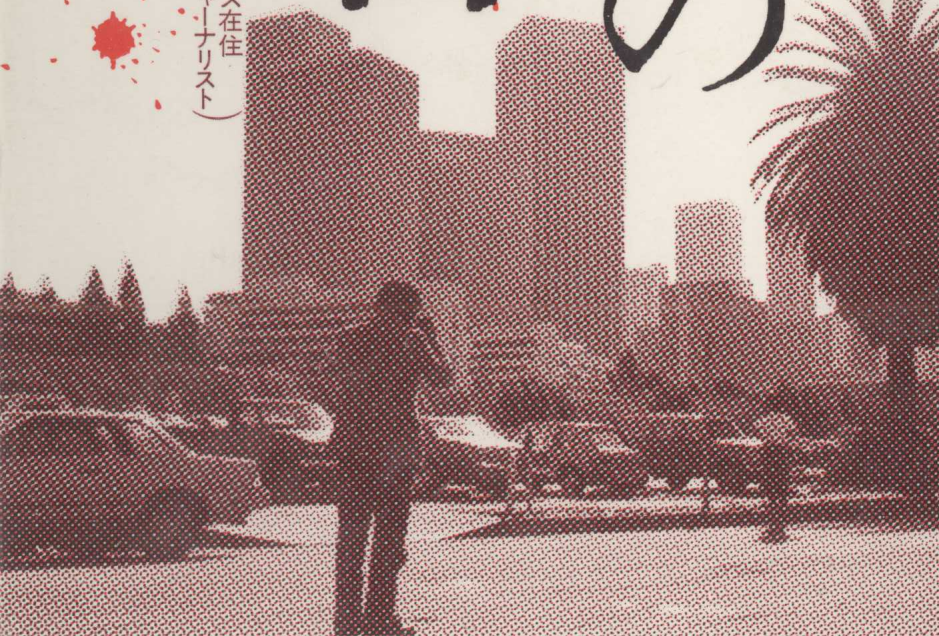
北岡和義

(ロス在住  
ジャーナリスト)

取材協力

加藤祐二

(ロス在住  
ジャーナリスト)



13人目の目撃者

定価 1000円

---

昭和59年9月17日発行

著 者 北 岡 和 義

発 行 者 斎 藤 繁 人

発 行 所 恒 友 出 版 株 式 有 限 公 司

東京都港区六本木3-15-22

〒106 TEL 03 (402) 1631(代)

印刷製本 誠 隆 印 刷 株 式 有 限 公 司

---

0036-840904-2291

©KAZUYOSHI KITAOKA

285154



日文 701576880

岡和義

(ロス在住  
ジャーナリスト)

取材協力

加藤祐二

(ロス在住  
ジャーナリスト)

# 三浦事件「ロスからの報告書」 13人目の目撃者



A65894

徳文出版



1979年(昭和54年)5月4日午後5時30分、ジェーン・ドウ・88の死体発見(空中撮影。×印が現場)  
 1984年3月29日午前11時、ロス市警は白石千鶴子と断定、記者会見で発表 ○は著者





▲1979年8月4日、三浦和義・佐々木一美 結婚

▼1982年(昭和57年)11月30日午前1時10分、三浦一美 死亡 合掌





◀ 1981年11月18日午前11時10分、三浦夫妻銃撃事件発生  
(現場で三浦供述の通りカメラを備える筆者) ▼ ロス市警本部



## まえがき

一人の若い週刊誌の編集者が何の予告もなくフラリとロスアンゼルスへやって来て、私を訪ねた。彼は二年前の銃撃事件をくわしく聞き、現場へ案内してほしい、と言った。

一九八三年十一月中旬のことである。

ロスアンゼルスで発生した日本人夫妻の銃撃事件。一年後、撃たれた妻は死んだ。三浦一美は二十九歳であった。相模平野に沛然たる雨が降った。

銃撃事件の二年半前の五月四日、ロスアンゼルスの北郊サンフェルナンド・バレーの山麓で女の白骨死体が発見された。この死体は、日本からやって来てロスで謎の失踪をとげた白石千鶴子の変わり果てた亡骸だった。

三浦和義は三浦一美の夫であり、白石千鶴子の愛人であった。三浦和義は一美の死後、四人目の妻を娶り、一億五千五百万円の保険金を受け取って豪邸で優雅に暮らしていた。

ロスを訪れたその若い編集者らが「疑惑の銃弾」という刺激的なタイトルで、三浦和義なる人物の告発キャンペーンを開始したのは、一九八四年一月十九日である。

暗い疑惑の闇に光があてられる、との嬉しい期待感が広がった。

それから六カ月余が過ぎた。

途方もなく膨大な情報が「ロス疑惑」「三浦事件」のタイトルのもとに流されたが、残念ながら疑惑のベールは重い緞帳どんちやうの如く、われわれの視界をさえぎっている。

周知のとおり、疑惑の現場はカリフォルニア・ロスアンゼルスである。

カリフォルニアにはアメリカの自由と狂気が併存する。エスタブリッシュメントから逃亡した自由の人々で建設された大西部の街。シャロン・テート惨殺事件、人民寺院事件、そしてロスアンゼルス・オリンピック直前に発生したマクドナルドの大虐殺。ロス疑惑とはこのクレイジー・ランドを背景としている。ロスアンゼルスという舞台仕立てが、疑惑をより深く不透明にしているように思えてならない。

とすれば疑惑の検証は、やはり現場ロスアンゼルスからなされるべきであろう。少なくとも事件の目撃者、証言者はこのロスアンゼルスにいます。私の取材はその行脚から始まった。

疑惑の一つとされる三浦一美殴打事件の犯人を知っている男がいる——との情報をキャッチしたのが三月一日であった。彼は一度、事件について話してくれた。一度だけ。

それ以降、彼は私から逃げて逃げて、ついに視界から姿を消した。

なぜか。少なくとも彼は事件の当事者ではない。だが彼は事件に巻き込まれるのをひどく恐れていた。三浦騒動を憎んでいたのかもしれない。



本書を書き進める途中、私は一通の私信のある事件関係者に送った。

「まことに残念なことに海外で奇怪な死に方をされた方は、三浦一美さんや白石千鶴子さんだけではありません。ほとんど事件らしい事件にならないまま闇から闇へ葬り去られてゆく悲劇がたくさんあります。私がロスアンゼルスで耳にしただけでも数件あり、その一部を日本の月刊誌に書いたことがあります。一体、海外にいる日本人とは何なのか。なぜかくも不可解で悲惨な事件が続発するのか。しかも殺された者がマスコミの晒しものになっているのに真犯人は不問のままである。国際化の道をまっしぐらに駆け登ってきた日本と日本人の脆さを私は見る思いです。日本人は海の外で何をしているのか、不明です。日本製品だけが世界各国の市場を席捲しながら、なお日本人という民族が国際社会のリーダーたりえない実態がある。三浦事件とは、犯罪者の方が先に国際化してしまった一つの典型ではないかと考えます。真犯人は日本社会の、とくに日本のマスコミ界の非国際的感覚をあざ笑っているように思えてなりません」

残念ながら三浦疑惑は、日本の警察力だけではいかんともし難い事件である。同時に殺人現場をかかえるロスアンゼルス市警だけでも真相を解明しえないだろう。

ただ、忘れてならないのは、二人の若く美しい日本人の女性がこの地で殺されたということであり、間違いなく殺人者が存在するという厳然たる事実だ。日米両捜査当局の緻密で克明なる捜査で犯人を追いつめ、法廷の場へ引き出してほしいと祈るような気持である。

ロスアンゼルスへやって来た多くの取材者たちは意図するしないにかかわらず、事実とおよ

そ無関係の情報をたれ流していった。

だからロス市警の二人の刑事がわれわれ日本の取材者にこう皮肉をもらしたことがある。

「君らのやっていることは、報道ではなくてエンターテイメント（娯楽）だよ」

からかい口調の、その言葉の裏に事件をズタズタにされた捜査官の口惜しさ、怒りを感じるのは私だけだろうか。

私は本書で三つの事実を読者に伝えたいと考えた。

その一つは疑惑の発端となった銃撃事件をめぐる三浦供述と目撃者の証言の大いなる差、銃撃事件が現地ロスの日系社会へ与えた波紋と事件の国際性である。

第二の事実は、疑惑報道に携ったマスコミの取材戦争と狂騒ぶりである。本書を読んでいたできればよくわかるはずだが、記者会見にしても白石千鶴子の死にしても日本に正確に伝わっていないという事実。ほとんど客観的資料を収集し読みこなすことなく、報道が先走ったため、誤報につぐ誤報の累積であり、その情報を日本でさらに二次的、三次的に週刊誌や夕刊紙が加工するのだから、報道の惨状には目をおおうべきものばかりであった。そのため本書では日本における出版物からの引用は最低限におさえたつもりである。

第三の事実は、疑惑を解く突破口になるのではないか、といわれている三浦一美殴打事件の真相についてである。本書で詳しく検証したが、自ら犯行を告白した元ポルノ女優の証言の真憑性は疑いようなない不動のものだと確信している。事件のカギを握る証言者の話は、取材者

である私に生々しい迫力として迫ってきた。

なおロスアンゼルスを日本では「ロサンゼルス」と書く人が多く、一部、新聞も「ロサンゼルス」と表記しているが、「LOS ANGELES」と発音どおりに正しく表記すると「ロスアンゼルス」となる。ロスアンゼルス市警を現地では「LAPD」と略称しているが、日本では「ロス市警」が一般化しているので本書でも「ロス市警」を使用した。

（本文中敬称略）

北岡 和義

過去二十年間、アメリカの法廷は人権をめぐる模索をつづけてきた結果、被害者の人権よりも犯罪者の人権を擁護する方向に向かっていった。

——『ペントハウス』一九八四年  
三月号、ウィリアム・タッカ  
ー「アメリカの正義とは犯罪  
である」より。

13. 人目の目撃者 目次

|      |   |
|------|---|
| まえがき | 5 |
|------|---|

## プロローグ

|        |    |
|--------|----|
| パームツリー | 16 |
| 奇妙な光景  | 18 |

## 第一部 惨劇の現場

|       |    |
|-------|----|
| ■ その日 | 24 |
|-------|----|

|         |    |
|---------|----|
| 目撃者     | 25 |
| 混乱した第一報 | 30 |
| 深夜の出来事  | 35 |

|      |    |
|------|----|
| ■ 取材 | 38 |
|------|----|

|         |    |
|---------|----|
| 何か、変だ   | 40 |
| 記者のこだわり | 44 |
| 変わり果てた姿 | 46 |

|      |    |
|------|----|
| ■ 犯罪 | 50 |
|------|----|

|           |    |
|-----------|----|
| 相次ぐ日本人の被害 | 50 |
| 幻の防犯映画    | 54 |
| 恐怖の銃器社会   | 58 |

|        |    |
|--------|----|
| ■ 事件直後 | 65 |
|--------|----|

|          |    |
|----------|----|
| タレコミ     | 65 |
| 初動捜査記録   | 67 |
| ロスの記者たち  | 71 |
| 大統領への抗議文 | 74 |

|         |    |
|---------|----|
| ■ 日系人社会 | 83 |
|---------|----|

|       |    |
|-------|----|
| 献血運動  | 83 |
| 救護委員会 | 87 |
| 殺人の相談 | 90 |
| 真実の証明 | 95 |

## 第二部 『疑惑』を追って

|          |     |
|----------|-----|
| ■ マスコミの嵐 | 102 |
|----------|-----|



『週刊文春』が書いた 102 / マスコミ探偵団 109 / 日本からの電話 114

■狂騒曲 118

飛び交う情報 118 / スクープ合戦 122 / 千鶴子を探せ 127

■加州浪人 133

疑惑の街 133 / わが内なる想念 136 / 新聞の逡巡 141 / 観客席からレポーターへ 144

■記者会見 149

ロスアンゼルス郡検視局 149 / 日本女性の死体は 154 / ジェーン・ドー 88 158 /

不思議な記事 162

### 第三部 事件と証人

■極秘情報 178

ジャンク・ヤード 178 / 日米歯科診療の違い 183 / レントゲン写真 187 / 一美殴

打の真犯人 190 / ある男の証言 195

■歯型鑑定 200

ロス市警の困惑 200 / 資料到着 206 / ベイル博士 212 / 断定 219

■千鶴子無惨 225

死体検案書 225 / 殺人事件の謎 229

■行脚 236

メキシカン・ヒッピー 236 / 佐々木夫妻の来米 239

■追跡……………247

不可解な沈黙 247／矢沢事件露出 252／なぜ君は逃げるのか 257／穴倉記者との  
対談 264

#### 第四部 ロスアンゼルスの実

■検証……………270

一美の親友の証言 270／奇怪な反論 274／航空券の謎 279／画期的な記者会見を 283

■確信……………287

ロスの日本人たち 287／事件の背景 291／広報官ダン・クック 297／二人の日本人  
が共謀？ 302／ロス市警の自信 307／13人目の目撃者 312

〈資料篇〉……………316

取材後記・こだわり続けた三年間……………加藤 祐二 330  
あとがき・一美さんの脳は生きていた……………北岡 和義 340

#### 〈写真提供〉

『週刊文春』 共同通信 『USジャパン・  
ビジネスニュース』 佐々木良次・康子

装丁・三関 努

# プロローグ